

論文内容要旨

論文題名:急性冠症候群患者に対する心臓リハビリテーションによる運動耐容能と主観的健康観の改善は関連しない

専攻領域:内部障害リハビリテーション領域

氏名:新井 龍

内容要旨

【目的】心臓リハビリテーション(心リハ)は、患者が病気と病態を理解し、多職種が連携して患者とともに疾病と戦う医療であるため、包括的心リハプログラムでは、運動療法以外にも心理社会的因子に対するカウンセリングと患者の QOL 向上を目的とした介入は重要な要素である。既存の研究では、心リハ患者を対象として心リハプログラムの QOL に及ぼす効果を検証した報告は散見されるが、QOL の改善の程度と運動耐容能の改善の程度との相関関係を検証した研究は希少である。本研究では心リハによる運動耐容能と主観的健康観の改善との関連を明らかにすることを目的とした。

【対象と方法】本研究は、平成 27 年 3 月から 12 月に、昭和大学病院で急性冠症候群(ACS)に対する冠動脈インターベンション治療(PCI)に成功後、心リハ導入説明時に本研究参加の同意が得られた男性患者 66 名のうち、心リハを中断した者、SF-36 の記載拒否、記入不備があった者を除外した 15 名を対象者とした。心リハ前後に、年齢、BMI、収縮期血圧・拡張期血圧、心拍数、現病歴、既往歴、喫煙歴、発症前スタチン薬服用の有無、発症時の職業の有無、各種血液データの 15 項目と、心肺運動負荷試験、SF-36 の結果を、定量的比較および相関について検討した。また、最高酸素摂取量の変化率の大小と役割/社会的側面(RCS)の低下率の大小でそれぞれ 2 群間比較を行った。本研究は、昭和大学保健医療学部倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号 271)。

【結果】心リハ後に運動耐容能、総コレステロール、LDL コレステロールは有意に改善した。SF-36 の身体的側面(PCS)スコアは有意に上昇したが、RCS スコアは有意に低下した。また、運動耐容能と SF-36 のサマリースコア間に相関を認めなかった。さらに、最高酸素摂取量の高改善群と低改善群との比較では、患者背景や血液データ、最高酸素摂取量に有意差はなかったが、PCS は低改善群でのみ有意に上昇し、MCS は心リハ導入前後ともに低改善群で有意に高く、RCS は両群共に心リハ後有意に低下した。RCS 小低下群と大低下群との比較でも同様で、心リハ後両群共に RCS は有意に低下したが、他の因子の変化はなかった。

【考察】RCS の有意な低下は、先行研究とは異なり、身体機能が改善しても、社会生活に不安を抱えている可能性が示唆された。また運動耐容能と主観的健康観において相関関係が認められず、運動耐容能のみが QOL に影響しているわけではなく、運動耐容能の改善に精神的側面

および役割/社会的側面の QOL 改善が伴わない患者の存在を示唆した。慢性疾患患者やその家族は、疾患とその管理のために社会的接触が減少する可能性があり、心リハ導入後も心疾患の慢性化に伴い、食事指導など生活習慣全般に介入する方法など、意図的な介入がなければ、QOL 特に社会的側面の低下が起きる可能性があることが明らかになった。

【結論】ACS に対する心リハ実施患者の運動耐容能の変化率と主観的健康観の変化率は関連していなかった。